

5．発達支援インスティテュート

5.1. 心理教育相談室

心理教育相談室は、子どものことや家族のこと、あるいは自分自身のことなどで悩んでいる人に対して、臨床心理学の専門的立場から援助を提供することを目的として開設されている。誰にでも利用できる地域に開かれた相談室であるが、相談は予約制で、はじめて相談申込みする場合には必ず電話で受け付ける方式を取っている。

電話受付した相談は、週1回のスタッフ・カンファレンスで担当者を決めて、受理面接（インテーク）を行う。インテークでは相談内容や相談者の現状、来談意志等を確認し、その結果をもとに心理アセスメントを行い、継続相談ケースとして受理するかどうかを決定する。継続相談ケースとして面接する場合は原則として週1回（50分）の来室である。なお、他機関（病院など）に紹介することが適切と思われるケースについては、インテークの段階でそのようにガイダンスする場合もある。

本年度（3月1日現在）の新規電話受付件数は30件、インテーク回数20件である。また、本年度及び過年度から継続している相談者数は、遊戯面接14名、心理教育面接23名、臨床心理面接21名である。

（心理教育相談室長 播磨俊子）

5.2. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会は、センター長（研究科長）、副センター長、基幹研究部門主任研究員及びその他委員会が必要と認められた者で構成し、研究部門の新設、改廃、プロジェクト研究の決定、予算、決算、その他管理運営に関する事項を審議することになっている。

今年度は、センター設置の初年度であり、同時に、センター業務と深く関係する発達支援論コース（1年制大学院）の1期生の受入れ年度でもあった。さまざまなことから一からつくる必要があったため、規程によるセンター運営会議だけでなく、毎週1回の定例センター会議（センター長は出席しない）を開催し、運営に当たった。そのため、以下、定例のヒューマン・コミュニティ創成研究センター会議での審議事項について報告する。

1. 予算、決算について

平成17年度には特別教育研究経費（連携融合事業）が採択され、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下「HCセンター」という。）は同経費による運営が可能となった。また、発達科学部での研究を事業化した企業（ジーン・アンド・ジーンテクノロジー）より奨学寄附金を受け、さらに科学研究費補助金も2件獲得したため、センター業務は円滑に遂行できた。

予算は、「ヒューマン・コミュニティ創成研究センター開設記念シンポジウム」の開催、部門研究、プロジェクト研究に配分し、子育て支援サテライト施設である「のびやかスペースあーち」と秋期に開催した「福祉教育・ボランティア学習学会」についても、HCセンター取組みの一環と位置付け、若干の予算配分を行った。さらに、「共同プロジェクト室」の整備費に若干の予算を割り当てた。

上記予算に基づいて決算を行った。本年度はセンター設立初年度であり、さまざまな設備費を要したが、次年度以降には設備費は多額を要しないと思われる。今後の課題としては、安定的な部門予算の確保とプロジェクト研究の予算獲得が重要であると思われる。

2. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター開設記念シンポジウム

平成 17 年 5 月 25 日，発達科学部校舎にて，神戸大学大学院総合人間科学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター開設記念シンポジウム「地域と大学のプラットフォーム～人間的な社会の創成を目指して～」を開催した。

シンポジウムは，記念式典，記念講演及び分科会で構成され，記念式典では，野上学長，兵庫県知事代理，神戸市長代理より挨拶をいただき，続いて HC センターの概要説明を行った。

記念講演では，元神戸新聞論説委員で経済評論家の内橋克人氏に「人にやさしい社会づくり・神戸からの発信」と題し，現在の社会・経済状況の中で，HC センターがどのような社会づくりを目指して実践的研究を行うのか，といった今後の指針に関わる話をいただいた。内橋氏の講演は大変好評であり，参加者は大きな感銘を受けた。分科会は，HC センターの実践的研究に結びついた 8 つのテーマ（以下参照）に基づいて開催し，熱心な議論が交わされた。

参加者からは，内橋克人氏の記念講演への賛辞とともに，HC センターの今後の発展に対する期待が表明されるなど，数多くのエールをいただいた。後日に，内橋克人氏による NHK ラジオ番組での紹介もなされ，全国からの照会や見学など多くの反響を得ることができた。

シンポジウム参加者の内訳は以下のとおりである。

事 項	参加者人数	
記念式典・記念講演	374	
分科会	分科会総計	402
大人は人生のどこで学ぶか		47
市民の科学と大学		38
キャリアサポート		13
福祉教育・ボランティア学習の可能性と課題		35
子育て支援を契機とした共生のまちづくり		67
思春期の危険行動の防止		35
このごろの女の子，男の子		134
数理科学と音楽の融合		33
	延べ総数	776

3. 子育て支援サテライト施設「のびやかスペースあーち」の開設

旧灘区役所の跡地を利用して，子育て支援のためのサテライト施設「のびやかスペースあーち」（以下「あーち」という。）を平成 17 年 9 月 6 日にオープンした。「あーち」の詳細は別記するため，ここでは HC センターとの関係だけを記したい。

「あーち」は，基幹研究部門である「家庭・子育て支援」及び「障害共生支援」の 2 部門が中心になり，運営されている。地域連携研究として多方面からの注目を集めているが，事業協力について，HC センターの他の基幹研究部門とどのような関わりができるか，なお検討の余地はある。

「あーち」の運営に関わっては，外部機関や個人の協力，連携はできてきたが，HC センター全体の研究活動として展開する工夫と必要性がある。また，運営のための経費（予算）の獲得に多大な努力を払ってきたが，安定的な資金獲得が今後の課題として残されている。

4. プロジェクト研究

今年度は、「出版プロジェクト」と「市民の科学に対する大学の支援に関する実践的研究」の二つのプロジェクトが設定された。

「出版プロジェクト」は、7名の学部教員が関わり、「人」と題した書物を出版する予定となっている。

「市民の科学に対する大学の支援に関する実践的研究」プロジェクトは、サイエンスカフェを精力的に実施し（12回開催）、市民、学生の好評を得ることができた。

また、プロジェクト研究用の事務室として、新たに「共同プロジェクト室」を設置した。

「共同プロジェクト室」には、デスク、ロッカー、書棚等を配置し、エアコン、LAN 設備を整備した。同室は、プロジェクト・メンバーのブースとして利用することを目的としているが、基本的にはオープンな部屋として学部構成員すべてが利用可能とした。

5. 研究集会、公開講座など

今年度には「福祉教育・ボランティア学習学会」の他、幾つかのワークショップ、公開講座等を開催した。

「福祉教育・ボランティア学習学会」は、「ともに創ろう共生の社会・被災地からの学び」をテーマに、11月25～27日に開催し、4つのフォーラムと5つの課題研究の他、多数の自由発表があり、約300名の参加者を得た。

収益事業としては、平成17年10月15、16日、平成18年3月4、5日に「ヘルスプロモーション」のワークショップを、「子ども家庭支援のための専門職講座」を平成18年3月4、11、18日に開催した。ワークショップには第1回目、第2回目ともに全国から各々70名が参加した。公開講座は3日間を通じた専門職用講座であり、29名が参加した。これらの集会はいずれも好評であったが、獲得した収益は単年度で消化しなければならない等の不便があった。さらに事業実施に当たっては、ワークショップ室の拡充整備が必要であることも分かった。平成17年度には学部の教室2室をワークショップ実施可能な部屋として模様替え、整備したが、なお100名程度の参加者を収容可能な部屋が不足している。

他に、収益事業ではないが、以下の公開講座を開催した。

- (1) 「人権教育とは？」(阿久澤麻理子氏)平成18年1月13日開催、20名参加
- (2) 「障害のある人たちが地域で当たり前で生活するためのたまり場づくりセミナー」平成18年2月12日開催、56名参加
- (3) 「大学で自分の世界を広げよう～知的障害をめぐる社会的課題解決に向けた本人と大学の知との協働～」3月10、17日開催、52名参加。

6. その他

地域連携センター活動発表会、新構想大学フォーラム（於、広島市）でHCセンターの活動報告を行った。

また、各種のインタビュー、取材に応じ、新聞でも年間22回、報道された。

HCセンターのロゴとロゴ入りの封筒を作成し、英文表記を Action Research Center for Human and Community Development（ARCHCD）とした

（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会委員 朴木佳緒留）

5.3. のびやかスペースあーち運営委員会

「のびやかスペースあーち」(以下「あーち」という。)は、神戸市灘区と神戸大学との包括協定に基づき、旧灘区役所庁舎跡地の2階部分約350㎡に平成17年9月6日から開設した。

この開設に至るまで、発達科学部教員や学生、地域住民や行政職員、企業職員などにより、開設準備委員会を組織し、「あーち」の名称やコンセプト、規則などについて議論した。開設準備委員会は、「あーち」開設以降は連絡協議会と名称を変え、定期的に議論の場を設けている。

9月6日の開設に先立ち、9月4日には、「あーち」及び隣接する灘区民ホールにおいて、「あーち」のオープニングセレモニーを実施した。稗田小学校と成徳小学校児童による和太鼓演奏、長峰中学校吹奏楽部の演奏、たんぼぼ作業所のアフリカンドラム、神戸大学サークルのチンドン芸、フェミナクラブの環境プログラム、神戸市助役、神戸大学理事の祝辞などを内容とし、各界500名程度の参加者を得た。なお、オープニングセレモニーの記事は、神戸新聞平成17年9月4日、読売新聞9月20日に掲載された。

「あーち」では、実践的な研究活動、発達科学部学生などに対する教育活動、住民へのサービス活動に大別することができる。

実践的研究としては、大きな成果を挙げるには開設からまだ間がないが、今後の展開の準備を行い、方向性や方法を模索することができた。実践的研究に関わる実践活動を組織化し、研究集団の組織化に向けて動き出した。また、「あーち」の建設そのものの記述が実践的研究の一部となった。それらの概要は、「あーち通信」創刊号～第6号(2005年10月号～2006年3月号)に、伊藤篤と津田英二が連載した記事にまとめている。また、「あーち」での実践的研究については、津田英二「地域と連携した大学の新たな展開」『月刊社会教育』2005年11月号；津田英二「地域と大学との協働による社会的ネットワークの創成」『月刊マナビィ』2006年2月号にも掲載された。

教育活動としては、教職課程を履修している学生に対する準備教育、フォローアップ教育の場として、また博物館学芸員資格取得を目指す学生の博物館実習の場として、有効に機能している。特に、博物館実習としては、計5回の企画が実施され、各回4～8名の学生が積極的に展示解説に取り組んだ。

- 第1回目 9月23日～28日 「小川譲が見た景色」(灘区内の芸術家の作品展示)
- 第2回目 10月26日～30日 「水族館がやってきた」(須磨水族園との協働)
- 第3回目 1月14日～19日 「あーとはなす・みんなとはなす」(芸術系学生作品の展示)
- 第4回目 2月17日～23日 「うみ in あーち」(小規模通所授産施設たんぼぼとの協働)
- 第5回目 3月17日～23日 「子どもがつくる世界」(ぷちばんそーとの協働)

これらのうちいくつかは新聞でも取り上げられた(読売新聞平成17年10月26日、神戸新聞平成17年10月26日、神戸新聞平成17年11月26日、神戸新聞平成18年2月18日いずれも朝刊)。また、学生のボランティア体験の場として日常的に開かれており、多くの学生がそれぞれの関心から「あーち」の運営やプログラム等に関わっている。

住民サービスとしては、乳幼児やその保護者をターゲットとした子育て支援(ドロップインセンター機能、ファミリーサポートセンター機能等)、幼児から学齢期の子どもを対象としたプログラム(子どものたまり場づくり、子どもの自己表現支援)、異世代間交流プログラム、文化芸術の発信・交流などが行われている。

これらの実践については、上記新聞記事の他、神戸新聞平成17年4月7日、読売新聞平成

17年4月22日，日本経済新聞 平成17年11月14日で取り上げられた。

こうした展開をするための事業経費として，運営費交付金（神戸大学教育研究活性化支援経費を含む。）の他に，文部科学省「地域子ども教室支援事業」の委託，文化庁の「文化芸術による創造のまち」支援事業の助成を受けた。

（のびやかスペースあーち運営委員会委員 津田英二）

5.4. 社会貢献準備室

社会貢献室としては，昨年度学部構成員から収集した，社会貢献に関するデータを基に，学部構成員のおよそ4分の1にあたる25名の教員に社会貢献レポートの執筆を依頼し，原稿校正後Webにて公開した。Web公開したものは，更に出版用に校正し刊行した。

当初の目的の一つであった社会貢献レポートの出版に関しては予定どおりである。

もう一つの目的であった社会貢献室主催の公開講座開催に関しては，本年度は他の公開講座開催のため，来年度以降に計画することとした。総合的には，目的は概ね達成されている。

（社会貢献室長 高橋 正）